

小林多喜二伝 補遺・新6

倉 田 稔

もくじ

はじめに

- 1 渡辺卓 新調査
- 2 芥川・里見講演会
- 3 原氏インタビュー
- 4 吉田 隆子
- 5 畑中康雄の書
- 6 新しい金属プレート
- 7 遺体写真の撤去
- 8 最近の研究の若干
- 9 多喜二ブーム

はじめに

これは、商大百年記念誌にのせた稿（これを補遺6番目とするが）、それに最近の幾つかを合体したものである。「再刊 くき」への雑記も入れる。そのため、補遺・新6とする。

拙書『小林多喜二伝』（論創社 2003年）に関して、私は、その後の調べや補いを、「小林多喜二 補 3」（『商学討究』54,4）「小林多喜二伝補 4」（同56,1）「多喜二書き込み および小林多喜二伝 補 5」（『商学討究』56,4）で書いた。

拙書の人名索引は、インターネットのホーム・ページ「小樽社会史国際研究所」をご覧ください。正誤表も載せた。

戦前の日本は、寄生地主制、天皇制が強固で、貧富の差が大きかった。戦後は、農地改革が行われ、資本主義が発達し、貧富の差が、戦前のように目に見えるようには感じられなくなった。そこで、戦前は治安維持法のような法律があるにもかかわらず、小林多喜二のような活動家が輩出した。

1 渡辺卓 新調査

『朝日新聞』2008年7月16日（水）、中京3県にでた版の8面に、「三重出身の教師 多喜二に影響」の記事が書かれた。相原亮（四日市支局）筆である。副題は、「小樽商の渡辺卓から文学の志学ぶ」「三重大教授、業績に光」とある。

記事はまず、こう始まる。小林多喜二が小樽商業学校時代、文学を志すのに影響を与えたといわれる三重県出身の国語教師渡辺卓。これまでほとんど知られていなかった渡辺の詳しい経歴や業績を、三重大の尾西康充教授（近代日本文学）が突き止めた。

本文は、『小林多喜二伝』からの紹介で始まる。

渡辺は1916年から2年間、小樽庁商で国語や漢文を担当し、生徒から「卓さん」と呼ばれて人気があった。授業ではよく作文を書かせ、多喜二の作文は、いつも推薦作文に選ばれていた。

多喜二の親友は「小林多喜二が文学を志すにいたったことに関しては、渡辺卓という国語の先

生の影響を考えないわけにはゆかない」と語った。

当時の多喜二は渡辺と一緒に校友会誌を編集していた。倉田は話す、「小林は、志賀直哉の小説から学んだが、直接教わったのではない、一方、小説家の『卵』だった小林は、渡辺卓から生き方で影響を受けたと思う。その存在は大きい。」

尾西教授の調査によると、渡辺は1890（明治23）年、久居藩士の四男として生まれた。第一中学校（現・津高校）などを経て国語の教員になり、北海道を始め、新潟や福岡など全国の学校で教壇に立った。

北海道庁立小樽商業学校は初任地で、赴任した一九一六年には多喜二も入学した。豪快な性格で、第一中学時代は驪馬に乗って登校。教諭になっても変わらず、小樽では演奏会に芸者と舞台上がって合奏。学校から大目玉を食らった。

戦後は福岡県の大学で教え、56年ごろ津市に戻った。「文藝を好み、『自由』という言葉がぴったりの人だった」と、三女・鬼頭正子さんは言う。「教育者の父を初めて知ったが、自由な性格は学校でも家でも変わらない。」

尾西教授は話す。「小林のヒューマンイズムの精神が育まれる多感な時期に、渡辺氏のリベラルな性格が大きな影響を果たしている。」

以上、新しい調べである。これ以外に、相原氏からの電話で私が知ったことは次である。

渡辺卓の家は藤堂藩の武士だった。津の人であり。旧制第1中学を出て、名古屋の神宮皇學館（現・皇學館大学）へを卒業した。この学校はリベラルだった。彼は古典に詳しかった。東京で退学した。まず尊商につとめる。そこでは芸者さんと舞台上に立って、遊んだ。そのため校長に怒られ、転勤した。新潟へゆき、秋田にもいた。両親に怒られる女性と結婚した。後に、その人は別れた。本人はリベラルな文学好きだった。娘さんに、そんなに勉強するな、と言った。

2 芥川・里見講演会

昭和2（1927）年5月20日、芥川龍之介は、花園小学校で開かれた文芸講演会で講演をした。前年暮れから鳴り物入りで売り出されていた改造社の円本「現代日本文学全集」の宣伝のためであった。『小樽新聞』（5月22日、夕刊）は、「聴衆の度胆を抜く芥川里見両氏の文芸講演会」の見出しで、報じた。午後5時（四時半の記述もある）にはじまり、千五百人が聞きに来て、男女半々、無料だったという説と入場券が必要だったという記述がある。小樽新聞の米山記者の開会の辞、改造社の比嘉の挨拶があり、芥川の「描けていること」の講演が始まった。小樽新聞によればこうである。「文字で書かれてることが皆文学です。無用の者入べからず も文学です。対頂角は相等し も文学です」と、初つ鼻から度肝を抜く。「芸術は内容には関しない。鼠が描かれているから馬を描いたものより偉大でないといふ事はない。人間をかいているからカップの絵より立派だなんて事はない」といふ調子で、氏独得の文学論がシニークとフォーモアの中に三十分で終了。

里見は、「永遠の偶像」の題で講演した。

講演が終わって久米正雄監督の「作者の生活」や「酒中日記」の映画があった。(1)

伊藤整もこれ聞きに行った。

3 原氏インタビュー

佐藤藤吉・チマは、養子を3人迎えた。初め弟・佐藤光雄であり、その妻は美幸で、2人の間

にできた子は満である。その後、和枝を迎えた。多喜二の妹ツギの娘である。彼女は、今札幌に
いる。その後、雄造を迎えた。彼は、藤吉の妹・原トミの息子である。

佐藤藤吉は、きょうだいが多く、大津藤太郎、森トキ、佐藤藤三郎、佐藤藤四郎、原トミ、大
津永雄、佐藤歳雄、佐藤光雄といる。

多喜二虐殺の際、多喜二の母が赤ん坊をおぶって築地警察へ行ったが、その赤んぼうは、昭和
四から五年に生まれた和枝かもしれないと、原氏。

原氏の父は北見出身で、伊達紋別の高橋是清の牧場で働いた。

藤吉の父・留吉は、漁をやめた。藤吉は銀行の後、朝里で、豆腐の製造と卸をした。彼は恰幅
がよく、口ひげを生やした。

チマさんは、よく喋った。キセルでタバコを吸った。親戚気質が強かった。セキはきつい感じ
だった。佐藤家の人はあまり喋らなかつた。原絢一は昭和三二年、小樽商大を卒業した。

4 吉田隆子など

吉田は、1910年に東京で生まれた。作曲を、橋本国彦、菅原明朗に、ピアノをローゼンスタン
トに学んだ。21才で、「カノーネ」を『音楽世界』に発表した。久保栄と結婚した。「小林多喜二
追悼の歌」(ソプラノ・バリトン)を作曲した。未完成オペラ・小宮編著『君死にたもうことなか
れ』(新宿書房 2005年)、がある。

「小林多喜二追悼の歌」の歌詞は次である。(2)

道遠く敵の嵐つのもとも よし屍の山築くとも
自由の国のあの太陽は 明るい希望に輝いてるぞ！
さあ！ 春の氾濫を以て 敵の嵐を！
流された同志の血はむだにするものか
兄弟！ 世界中のプロレタリアよ
明日は勝利、明日は勝利、明日は勝利だ！
旗を高くあげろ！

解説によれば、小林多喜二追悼のため、プロレタリア音楽同盟が作った曲。佐野嶽夫の詞。築
地小劇場で発表される予定が、労農葬の解散で不能となった。

5 畑中康雄の書

畑中康雄『小林多喜二 破綻の文学』(彩流社 2006年)が出た。本書は「プロレタリア文学
再考」と副題が付けられており、それにふさわしい。

本書は、多喜二の有名な文学作品を俎板に載せて、それを批判したものである。ただし技巧の
上での批判である。

著者は、「人を殺す犬」「防雪林」「東俱知安行」を良いと評価する。一方、「不在地主」「厚情細
胞」「オルグ」「地区の人々」「当生活者」の破綻を指摘する。「蟹工船」にも1つの大きな疑点が
ある、とする。また「一九二八年三月十五日」を彼の傑作とする。これは小生と同じ意見なので、
頼もしい。

著者の批判は、一見、従来の通常の「ブルジョア的」批判の系列と同じように見える。だが、

著者の批判は観念的ではなく、作品それぞれに内在して吟味しているから、それとは違う。これらは説得力がある。要するに、小林多喜二は実際の運動をよく知らなかったのだという。労働者・農民の実際の闘いの内容は知らなかったのだ、と。これはありうる。実際、彼が共産党に入ってから活動したのは、1年余であり、実際は労働組合で活動していたわけでもないから、この意見は妥当である。今後、この著者の指摘を吟味する必要がある。

しかし、本書の読者たちの論評を聞いていると、本書は多喜二非難であると読んでいるようである。私は、これが多喜二非難をしているとは見えない。

6 新しい金属プレート

新しくできたJR小樽築港駅の国道側に、小林多喜二を記念する、金属プレートをはめた小さな石碑が出来た。多喜二家住居は、現国道の車道になってしまった。だからこれは、その地そのものではないが、家には1番近い場所である。ここに木の標柱が立っていて、それを撤去したものである。駅は昔はより札幌寄りだった。多喜二家から100メートル離れていた。

この金属プレートは、こうある。

「小林多喜二（1903-1933） 住居跡（旧 若竹町十八番地）」

碑文は縦書きで、こうある。

「明治末期、秋田から移住した小林多喜二の一家は、鉄道線路を背に、小さなパン屋を営んでいた。

当時、家の裏手は築港の工事現場で、タコと呼ばれた土工夫が過酷な労働にあえぎ、非人間的なタコ部屋に押しこまれていた。その実態は多喜二の心に深く焼きつけられ、後年「人を殺す犬」「監獄部屋」などの作品を生んだ。秀作「同志田口の感傷」の師弟が鯨漁で湧きたつ熊碓浜（東小樽）へ行くのもこの家からである。

緑町の小樽高商（現小樽商科大学）へは、四キロの坂道を歩いて通った。勤め先の北海道拓殖銀行小樽支店へは、築港駅から旧手宮線色内駅まで汽車で通勤した。」

この碑文は専門家が書いたと言われるが、一体誰だろう。断っておくが、私ではない。これは2つの点で良くない。こんなに短い分量なのに、無駄があり、必要なことが書かれていない。「人を殺す犬」「監獄部屋」は、ほとんど同じであり、どちらかでもよい。また「蟹工船」や「不在地主」など主要で有名な作品はここで書かれたのに、それらが無い。

7 小樽文学館における遺体写真の撤去

小生は次の文を発表した。「小林多喜二論（連載78）」（『らぶおたる』坂の街出版）である。

「市立小樽文学館の、多喜二遺体写真の撤去

『北海道新聞』の、今年、二〇〇二年四月二二日の夕刊（11面、小樽・後志版）に、市立小樽

文学館で、多喜二虐殺の写真外す、という標題の記事が出た。副題に、一月の紀宮さま訪問時、とある。

どうやら、こういうことである。今年、二〇〇二年、紀宮さまが北海道旅行で、市立小樽文学館（小樽市色内一）を訪問した際、同館が常設展示していた小林多喜二の虐殺の模様を伝える遺体写真のうち一枚を取り外していた、というのである。

それが四月二十二日に分かった。この写真はその後にも展示されていない、とある。

写真は紀宮さま訪問の直前に取り外され、同館の学芸員がその経緯を、市民グループ「小樽文学舎」のホーム・ページに公開した、と。

それによると、写真を「むごたらしい」「人間の域をはみだしている」とし、それを紀宮さまや一般来客者向けに展示することに「どうしてこんな理不尽な悲しみを、痛みを、つきつけねばならないのか」と疑問に感じたことを挙げている、と。

その上で、「誰にいわれたわけでもない。ほめかしもない」と、外部からの圧力はなく、独自の判断で取り外したとしている。

これはおかしい。議論がさかさまである。

まず、写真をむごたらしいと見ている点である。これは話が転倒している。写真はむごたらしいかもしれないが、それは、戦前の特別高等警察の行為がむごたらしかったのである。また「人間の域をはみだしている」というのは、写真がそうなのではなく、特高がそうだったのである。

これらは歴史的事実である。たとえば、原爆記念館で、被爆者の写真がむごたらしいからといって、その写真を隠匿するとしたら、その記念館はほとんど価値はなくなる。

「理不尽な悲しみ」や「痛みを」、日本人民も与えられたのである。これらの事実を示すことは、文学館としては必要である。

前後関係から見て、多喜二の遺体写真を取り外したのは、紀宮さまが来館されるから、ということと結び付いている。聡明なひとだから、理解できるし、考えるであろうと推測する。紀宮さまにも失礼であろう。

今回の行動は、天皇制が強く残っていることも示している。天皇制はきれいごとだけを表に出すことになっているから、取り外しはそれを守ったのであろう。

実際は、お役人の事なかれ主義がそうさせたものである。

写真の取り外しには、思想的な理由はないと強調している、とあるが、もちろん、そういうわけで、お役人主義と、天皇制、という理由がある。相当政治的な判断である。

そして、事実と歴史をすこしでも展示しようという、科学的・合理的な態度を、公立の博物館・美術館・文学館が持っているとするれば、市立小樽文学館はそれを捨てたのである。これは責任がある。文学館は、きれいごとの写真しか展示しないと決めたのであろうか。

少なくとも、市立小樽文学館の最も目玉となる「商品」を、展示から隠してしまった。これは、来館者にとっても文学館にとっても、損失である。なにしろ日本史上、多喜二の虐殺は有名な事件だからである。この写真を見て多くの人は、歴史に対する正しい認識を持つのである。」

8 最近の研究の若干

小生の膨大な研究『小林多喜二伝』(論創社 2003年)が出てから、幾つかの研究あるいは発表がされ、そのうち、特筆するものを幾つか紹介したい。

小樽民民主催で、二回、私をめぐる討論会が行なわれた。二〇〇四年九月一五日と二〇〇五年八月とである。この書には、二〇〇五年四月、『北海道新聞』で書評が出た。ポスト・マルクス研究会で二〇〇五年三月(金沢)で、黒滝・宮城女子学院大教授が報告=書評をした。書評が、浜林正夫先生から「書評:倉田 稔『小林多喜二伝』」『人文研究』(小樽商大)110輯(二〇〇五年九月)でなされた。

私の研究が出るころ、多喜二生誕100年だったので、いくつか研究書がでた。だがそれらは、時間的な余裕がなかったのか、あるいは他の理由で、私の研究を採り入れていない。その例外は、つまり採り入れているのは、

浜林正夫『小林多喜二と其の時代』(東銀座出版社)である。

私の調べの後、2つの重要な調べと資料がでた。まずスパイの評伝である。くらせ みきお『小林多喜二を売った男』白順社、また近藤栄作の回想(『モシリヤ』)である。

東京で2回のシンポジウムが開かれたことは、多喜二研究にとって大きい。白樺文学館:多喜二ライブラリーの主催であった。

そして、いわば第3回のシンポジウムが、つまり中国・河北大学で、小林多喜二国際シンポジウムが、二〇〇五年十一月に開催された。その記録は、『いま中国によみがえる 小林多喜二の文学』(東銀座出版社)である。

小生は、報告「小林多喜二の小樽時代、および最近の研究文献」をした。前掲書で出版された。その雑誌に出なかったが、その参加記のうち3つは、『緑丘』99号 にでた。

また次の特集が出た。『「文学」としての小林多喜二』(『国文学 解釈と鑑賞』別冊 至文堂 平成 18年)である。

小林多喜二をふるさどで読む会編『多喜二と生地(大館)——その文学と読書会』秋田ほんこの会 2006年。ここには、秋田時代の論攷がある。

『小樽社会史国際研究所』創刊号(2006年)で、多喜二書き込みの発見者渡邊理により、その経過が書かれた。

ドナルド・キーン『日本文学の歴史』12巻 中央公論 で、多喜二を論ずる。

『蟹工船』(舵社)が大きい字で出た。

藤田廣登「多喜二の盟友たち」が出た。

作画 藤生ゴオ『マンガ 蟹工船』(東銀座出版社 2006年) ここには、島村輝の解説がある。

なお、私は、「『蟹工船』」(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 二〇〇五年二月号)、「多喜二と小樽高商」(「ヘルメス・クーリエ」第10号)を書き、「小林多喜二の小樽時代」(『『国文学 解釈と鑑賞』至文堂』別冊、『「文学」としての小林多喜二』二〇〇六年9月)も出た。

渡辺理さんが、小樽社会史国際研究所のホーム・ページ <http://www.la-classe.ne.jp/~mikurata/shakaisi.htm> で、多喜二書き込みについて書いた。

二〇〇六年二月二〇日、恒例の小樽小林多喜二祭が行なわれ、荻野富士夫さんの中国報告がされ、これは前記の行事である。そしてメインの、松沢信祐先生のすばらしい講演があった。多喜二研究も再び国際的になったこと、また白樺文学館が連続三回三年、多喜二シンポジウムを主催

あるいは後援したことが、最近の大きな動きである。

シカゴ大学のノーマ・フィールド教授が、多喜二の英訳本を準備しているそうで、心強いかぎりである。

映画『小林多喜二』に続いて、映画『時代（とき）を撃て、多喜二』が作られた。劇では、すでに、『母』、『早春の譜』がある。

なお多喜二の友人知人たちの調べを、東京で浜林正夫さんたちが開始している。

藤田『小林多喜二の東京時代』が出た。

2007年2月、小樽多喜二祭では、沢田章子講演がなされた。沢田さんには、『一葉伝』新日本出版社 二〇〇五年 がある。

多喜二の初期小説が発見された。曾根博義「小林多喜二『老いた体操教師』の背景とモデル」（『語文』日本大学 国文学会 129輯）に出て、曾根博義編『小林多喜二 老いた体操教師 瀧子其他』講談社文藝文庫 にある。

この小説のモデルは富岳丹次とし、その詳しい調査がなされた。

張朝 柯『小林多喜二』四川人民出版社 が出た。

眞壁睡溪先生が、次を見つけた。

滝子が勤めた小野病院は、小野弘介院長の病院で、現在なくなっている。

滝子がつとめた旅館は、つるや旅館で、駅前であるが、当時は、1つ通りを海側へ下がったところにあった。

9 『蟹工船』ブーム

文芸誌『すばる』07年7月に「プロレタリア文学の逆襲」が特集された。

佐野力氏の発案で、マンガ『蟹工船』（東銀座出版 2007年11月）がでた。これは半年で1・6万発行された。

氏は、『蟹工船』読後感想文コンテストを募集し、120編が集まった。これらが選ばれて、『若者はいかに『蟹工船』を読んだか』（東銀座出版 2007年）となった。そのうち、ネットカフェ部門の受賞作で、ビルのアスベスト撤去作業を請け負っている筆者は、「足場を組んだ高層ビルは、冬の海と同じで落ちたら助からない」と論じた。

『毎日新聞』2008年1月9日は、高橋源一郎と雨宮かりんとの対談を出した。これがきっかけとなった。これを読んだ元フリーターの書店員が、ブームに火を付けた。つまり、JR上野駅の書店員・長谷川仁美さんは、これを読んで共感し、手書きミニ広告を作って、『蟹工船』を平積みにした。すると、売れた。初め年配の男性が買った。だがその後20,30代が増えた。新潮社によると、購買層は、10代後半から40代後半が8割で、働き盛りの人たちだと。

『読売新聞』5月2日は、1面トップに。「『蟹工船』悲しき再脚光・」の題の記事を出した。

『週刊朝日』編集部女子が5月6日に読書会をした。

『琉球新報』5月11日、コラム「金口木舌」にでた。

『日本経済新聞』5月14日夕刊に、記事が出た。

その中で、書店が販売拡大努力した。文庫は400円であり、08,6月まで3ヶ月で35万部。売れた。といっても多喜二はそれでも毎年5000部売れていた。

『朝日新聞』5月13日 に記事が出た。

『産経新聞』5月14日では、「ワーキング・プアの連帯感」の記事が出て、香山リカがコメント

した。

『週刊新潮』5月29日に記事が出た。

新潮社は、今年5月まで、7千、2万、3万冊と増刷した。

フジテレビ系「めざましテレビ」2008年5月27日で、『蟹工船』が語られた。

こういう風にして、『蟹工船』は全国主要紙を総なめにした、

08年6月27日 てれび、ヴォイス、で扱われた。

新潮社は、今年に入って増刷が15万部、の説がでた。

都内の書店の50のうち49が平づみとなった。

「環境が似ている。「若い人が支持している。「働く環境がきびしい。「評判だから読んでみよう、という意見がある。

『北海道新聞』5月27日、「格差社会に響く『蟹工船』」の題で半面分だ。倉田 稔、佐野力をインタビューしている。「ソ連が倒れた後、読まれなくなり」しかし「ブームは、若年労働者が使い捨てられる現実、作品自体が持つ力、メディアをつかった仕掛けが結びついた。」と、佐藤千歳記者は書く。

「新潮文庫の100冊」に『蟹工船・党生活者』を26年ぶりに復活して入れた。1500の店で販売に力を注ぐことになった。

5月29日 テレビUHB「のりゆきのトークでショウ」であつかわれた。

テレビ北海道放送は、5月31日（土）13：05から14：30まで、

小林多喜二についての放送をした。「いのちの記憶 小林多喜二・二九年の人生」。これはブームと関係なく3年半前に企画をした。この制作には3年半かかった。5千万円かかり、視聴率は4%少しである、北海道だけだったので、従って20万人くらいが見ただろう、と。当日、見た人から30本の電話がかかり、「よかった」というものであった。翌日も4、5本の電話があり、再上映してくれ、と。スポンサーは形の上では小樽商科大学である。DVDが発売されることになった。評判がよいので、8月14日にも再放送となった。内容は少し拡大した。

『週刊 金曜日』7月25日

『週刊 エコノミスト』8月19日 にも出た。

(1) 芥川はこの講演旅行について、随筆「東北、北海道、新潟」および「講演軍記」で書いている。

(2) 『日本の革命歌』1985年 一声社。続いて、「二月二十日」「追悼歌」も収録されている。沼田先生に教わる。